

読者のひろばスペシャル

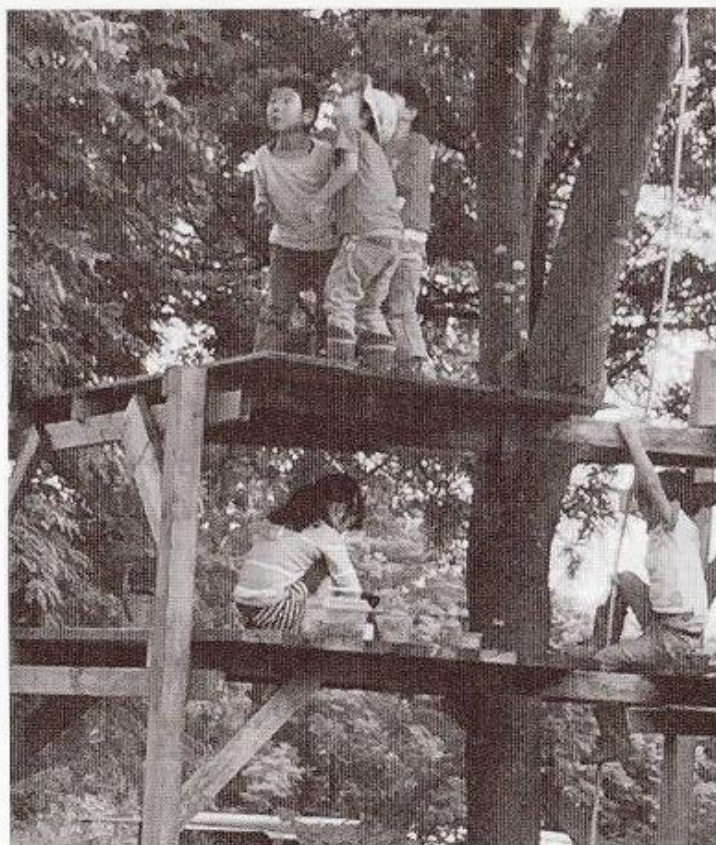
草花に触れ、虫を捕まえ、泥だんごを作る、
こんな当たり前のことを体験させてやりたい

福島の人たちに、
本当の笑顔が輝くときまで

福島原発事故を忘れてはならない、
とあらためて思い知らされるお手紙が届きました。

エデューカーレ51号(2012年9月号)

「福島川米沢移動保育の日々」で紹介した辺見妙子さんからです。



「よねざわ冒険遊び場あそべんチャーランド」。ツリーハウスの上でカブトムシを見つけた!

福島の人が、福島のことを語りたがらないのは

福島第一原子力発電所が東日本大地震により事故を起こし、5年半たちました(編集部注・10月にいただいたお便りです)。

よく、「福島にいる友人に、放射能の話をする」と聞いても「ええ、いい」という声を聞きます。「どうしたらいいのでしょうか」と。私もなぜなのかと考えてみました。そして、あることに気づいたので。

人は、他人から自分の容姿のことを言われると、とても気になります。ちょっとしたことで傷つくこともあるし、有頂天になることもあります。そのことと、今の福島のことを他県の人から言われることは似ているな、と思います。

親からももらった体のことは遺伝ですから、自分ではどうしようもありません。それを否定的に言われれば、自分で

はどうしようもないことなのです。ですから腹が立ちます。それは、親を愛して(憎んで)いればなおさらです。

それでどうするかというと「笑顔」です。七難隠すといいますが、ブスツとしているよりは笑顔を作ったほうがいいわけです。福島が今「復興」「復興」と熱に浮かされているかのように突き進むようにするのは、そのためではないでしょうか。

郷土を愛し、そこにとどまらざるを得ない状況の中では、否定的な要素は排除したいのだと思います。放射能の問題が自分に降りかかったのは自分のせいではない。けれども、いいえ正確に言えば、無関心だった自分のせいでもあることとはわかっていただけれども、「どうしようもない」ことは考えないことにしようとしているかのようです。

でも、それでは子どもは守れません。見かけの空間線量

が下がった福島において、深刻な土壌汚染は今なお続いているのです。

土壌汚染は広範囲で、 まだ危険な状態

「東日本土壌ベクレル測定プロジェクト」という団体が「みんなのデータサイト」を運営しているのですが、それによると、ひと目で福島の土壌汚染が非常に広範囲で危険な状態であることがわかります。

私は、子どもが安心して遊べる基準は、食品レベル100ベクレル/キログラム以下と考えています。それでなければ、草花に触れたり、虫を捕まえたり、泥だんごを作ったりと安心して外で遊ばせることができません。第一ケガができません。

「みんなのデータサイト」によると、放射性物質汚染対処特措法に基づき指定廃棄物の基準8000ベクレル/キロ

グラムを超える土壌汚染が、指定避難地域以外の福島市・郡山市・須賀川市に今年に入ってから測定でも点在しているのがわかります。

子どもは自然に近い生き物です。自然の中で人間として大切な情動を培ってほしい、と私は切に願っています。情動とは感じて動くことだと私は思います。そして「価値あるものに気づいたり感じ取ったりすることが感性」（昭和女子大学大学院 押谷由夫教授）であるならば、感じて動ける、つまり、自分で考える自分で話し、自分で行動できる人間になるには、自然の中でいやなことも含め体験することだと私は考えています。

子どもたちに自然体験を させるため、今年も 「空と土の交流広場」も

震災以降、福島での自然体験をあきらめ、福島市から50

キロ離れた米沢市へサテライト（移動）保育と称して活動を始め、5年がたちました。2011年10月当初は福島から通う子は一時保育の子がほとんどで、毎日預かる子は米沢市への避難者だけでした。

それが今は、福島市から3歳から6歳までの6人の子どもが毎日通っています。ほか山形市から電車で通う子が1人、米沢市への避難者が2人、そして伊達市から月に一度通う子が1人。多いときで10人の子どもが青空保育たけの子に通っています。

2014年7月から始めた「よねざわ冒険遊び場あそべ



「空と土の交流広場」にて。「住民交流会」と「ものづくりワークショップ」の活動の一つ、酵素ジュース（体の解毒にもなる）作りについて話し合う。



「空と土の交流広場」。住民交流会として、講師を招いてキャンプ講座を。

んちゃーランド」には、昨年延べ1000名近い方が遊びにきてくれました。

今年度から新たな枠組みで始めた「空と土の交流広場」には地元の方の参加が少しずつ増え、新たな展望が見えてきました。

福島の人たちが本心から笑顔で笑える未来を創るには、福島の現状から目を背けず直視し、放射能汚染をしっかりと意識した上で、子どもに對峙していかななくてはならないと思うのです。（特定非営利活動法人青空保育たけの子代表 辺見妙子 写真も）